

## 月山とともに生きる



やまがたの宝「志田周子」資源活用化実行委員会

## 西川町の概要

### 町名の由来と地勢

西川町は、一九五四年（昭和二十九年）十月に西山村、川土居村、本道寺村、大井沢村の四つの村が合併して誕生しました。町は山形県のほぼ中央、県都山形市の西方三十二キロメートルに位置しており、磐梯朝日国立公園の朝日連峰や月山とその支脈に囲まれています。

総面積の九十五パーセントが山地で占められ、平地は町を流れる寒河江川沿いとその支流沿いにわずかに広がっており、可住地面積は十三・一二キロメートル（三・三パーセント）しかなく、また、県内有数の豪雪地帯で、多い地区では五メートルを超える積雪があります。町のシンボルでもある月山では春、夏スキーを楽しむことができ、毎年四月上旬から七月下旬までの間、大勢のスキーヤーやスノーボーダーで賑わいを見せています。

## 昭和の西川町を支えた人たち

自然豊かな西川町では、昭和の初期から地域でさまざまな取り組みがありました。

大井沢村（現在の西川町大井沢）で地域医療に生涯をささげた志田周子（しだ ちかこ）女医の活躍。戦後教育の新たな芽生えとして、昭和二十年代後半から朝日連峰の麓にある大井沢小中学校で実践された「かもしか学園」の自然環境教育。

そして、戦争中から戦後一九四五年（昭和二十年）から一九四八年（昭和二十三年）までの四年間にかけて西川町岩根沢に疎開した丸山薫と岩根沢地区の文芸教育のはじまり。地域医療の確保が深刻な課題とされ、また、地球環境の保全に関する意識の向上が叫ばれている現代において、かつての西川町の取り組みは地域資源として改めて見直し、地域振興やまちづくりとして、広く後世に伝えていく「地域の宝」といえるものです。

## 地域医療に生涯をささげた女医 志田周子（しだ ちかこ）

### ■略歴

- ・一九一〇年（明治四十三年）十月二十八日
- ・山形県大江町左沢で生まれる
- ・一九一七年（大正六年）父の故郷でもあり、校長として赴任もしていた大井沢学校に入学
- ・一九二四年（大正十三年）山形第一高等女学校（現山形西高等学校）入学
- ・一九二八年（昭和三年）東京女子医学専門学校（現東京女子医科大学）入学
- ・一九三三年（昭和八年）東京女子医学専門学校卒業、同校付属病院勤務
- ・一九三五年（昭和十年）大井沢村診療所医、村医、校医に着任
- ・一九五六年（昭和三十一年）
- ・一九五九年（昭和三十四年）全国保健文化賞受賞、県知事・教育委員会・医師会表彰
- ・一九六二年（昭和三十七年）五十一歳で死去

### 【高等女学校までの周子】

一九二四年（大正十三年）四月、周子は山形市の山形第一高等女学校（現在の山形西高）に進学します。周子はここでも勉学に励んで優秀な成績を残し、将来を嘱望されました。一方で、寄宿舎での学生生活も大いに楽しみ、門限を破って、塀を乗り越えて帰ったこともあったと後に語っています。

### 【東京女子医学専門学校での周子】

周子の父莊次郎は7歳のとき、母りんと死別しています。りんは難産で苦しみ、医師が駆けつけたときは既に死亡していたのです。莊次郎は多忙な教師生活の中で医師試験の勉強を断念するしかありませんでした。莊次郎は成績のよい周子に思いを託しました。一九二八年（昭和三年）四月、周子は父の薦めで東京女子医学専門学校（現在の東京女子医科大学）へ入学しました。

周子は学校での勉学にいそしんだことはもちろんですが、同時に都会での青春を謳歌しました。友と語り合いながら、銀座をぶらぶら歩く楽しさも味わいました。医師としても

つと勉強したいと考えていた一九四二年（昭和十七年）七月、「三年でいいから大井沢に帰ってくれ」との父の頼みをいれて、大井沢に帰りました。



### 【地域での苦勞と活躍】

周子は大井沢の村医となつて診療をはじめ、校医として児童の検診にもあたりました。人口千五百人の無医村に二十五歳の女医一人、臨床経験の少ない周子が村人たちの病気を診ることは大変なことです。特に冬が大変でした。医療施設のある西川町間沢まで二十五キロメートル、重症患者の輸送は雪の上を村人が轎を引いて運ばなければならず、周子が患者に付き添って歩くこともしばしばでした。雪道を往診に駆

けつける周子を待たずに息を引き取る患者もいました。

大井沢では十分な検査ができないので、町場の大きな病院の診察を薦めても、村人は素直に受け取らず、「医者のかせに何もわからない」と非難されることさえありました。

一九三八年（昭和十三年）二月、母せいが急死しました。周子は結婚をあきらめ、一日も休めない村医として一層力を尽くすようになりました。

周子は婦人会長、村会議員の要職も務め、村の生活を向上させることにも気を配りながら、僻地医療の本腰で取り組みました。

家々を回つての熱心な指導の甲斐あつて、幼時の死亡、働き過ぎの若妻の死亡など山村に多い病気が年毎に減つていきました。

昭和十七年八月十八日刊の朝日新聞東京版で「仙境に咲く女医さん」という見出しで記事取り上げられたときは、全国に反響を巻き起こし、東京はじめ関東や戦地となつていた満州の兵隊からも多くの手紙やはがきが周子も元へ寄せられました。

一九五七年（昭和三十二年）には、

周子を主人公にしたNHKのラジオドラマ「僻地に生きる」が放送され、大きな反響を呼びました。

一九五九年（昭和三十四年）、二十数年にわたり医療福祉と保健衛生の向上に努め、学校医、婦人会長、町会議員として地区の人々の健康管理と生活の向上に奉仕された功績により、保健文化賞を受賞しました。



一九六二年（昭和三十七年）七月十八日、食道癌のため入院していた東北大学付属病院で、周子はその生涯を終えました。

### ■ 短歌について

文化面では歌人として数々の作品を残し、「志田周子歌集」も発刊されています。逝去後に地元と婦人会が中心になつて功勞を顕彰して歌碑が建立されました。



「西山にオリオン星座  
かゝるをみて患者に急ぐ  
雪路をふみて」

「夏の日の雑草のごと  
たくましく我は一生を  
終へむと思う」

「白煙の立つがに吹雪く  
雪原に立ちすくみいつつ  
往診の帰路」

■講演「辺地診療への随想」

昭和三十四年十一月

第二回社会医療東北学会(上市市)

「何にましても一番苦労しますのは、冬の仕事でございました。ことに往診ですが、私の所は非常に雪が深いものですから五十センチぐらい積もりますのはザラでございまして、時によりますと一昼夜に一メートルぐらい積もることもございます。そんなときの往診には二人か三人で迎えにまいります。とてもあの「かんじき」をはいて行くことができませんので、苦労してスキーを習ったりもいたしました。

只今では、小中学校の子どもが毎朝道をふんで広げてくれますので、スキーを使うなくてもすむようになり、だいぶ楽になりました。

それから、重症で入院の必要があったり、また、どうしても手術のために入院させなければならぬような場合の患者の輸送は、本当に苦労します。

こういう場合ですと親戚・部落の人二、三十人ぐらいの応援を得まして、ソリで運ぶのです。自動車の便のあるところまで六、七里、時によっては八里ぐらいもソリで引っぱって行かなければなりませんので、わたしも病院までついてまいります。何回かございます。それで手術のような場合ですと、なるべく早めに病院に送るようにいつも気を配っておりますが、手遅れで死んでしまうこともございました。」

【周子の生涯】 鈴木久夫著より



著作について

■『風吹峠』(かざほこうげ)

高橋義夫著 文藝春秋発行

・『狼奉行』で第一〇六回(一九九一年下半年)直木賞を受賞した小説家高橋義夫が志田周子をモデルにして書いた小説。

・主人公の千花(ちか)が、東京女子医学専門学校付属病院医局から故郷に帰る場面から始まります。



「恋も青春もなげうち、故郷の寒村へ女医となつて戻つた千花の苦悩と喜び」(横帯より)

■『周子の生涯』

鈴木久夫著 大風印刷発行

一九七五年(昭和五十年)十一月

・一九七二年(昭和四十七年)四月に大井沢中学校に赴任し、朝日町から西川町に籍を移した著者が、町のために何かを残したいと考え、ふるさとの人々のために生き、死んでからも人々に光を注ぎ続ける女性「志田周子」について記したノンフィクション。

・周子が食道ガンで入院したときの療養日記や、大井沢で面倒をみてあげていた室岡由里さんの手紙も収録されています。



志田周子に関連する事柄について

■ひとり芝居「真知子〜ある女医の物語」

「ひとり芝居 真知子」〜ある女医の物語〜

演出・構成・補稿 ゆきやこんこん

原作 鈴木久夫(周子の生涯より)

脚本 池田 はじめ

このひとり芝居は、志田周子女医をモデルにしたオリジナル作品です。



■今田裕美子(こんたゆみこ)さん

俳優・ワークショップリーダー

出身地／山形県天童市

高校を地元で卒業すると同時に劇団らくりん座(栃木県)に入団。その後上京し、タレントスクールに通いながら、フリーで数々の舞台公演に出演。一時、付き人の経験もする。

一九九八年(平成十年)「山形発信!」を目的に拠点を山形へ移す。ひとり芝居をメインに、語り劇、講演、山形短期大学人間福祉学科演劇課非常勤講師のほか、演劇手法を用いた表現力やコミュニケーション力などを養うための「夢こやワークショップ」を主宰。また、テレビ・ラジオ・CM等にも出演し幅広く活躍している。

【以上、今田裕美子オフィシャルホームページより抜粋】



周子が使用していた器具



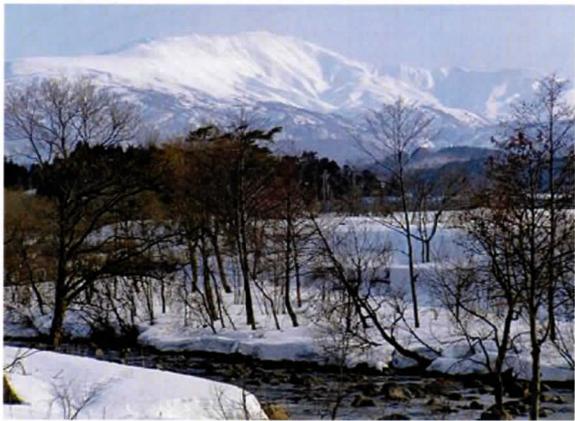
大井沢診療所跡

## 戦後教育の二つの新たな芽生え

### ■ 西川町の自然環境教育

朝日連峰の麓にある大井沢小中学校で実践された「かもしか学園」は、昭和二十年代後半から始められた自然教育です。

半世紀にわたり教師をはじめ村人、子どもが力を合わせて僻地の過疎と貧困を打開し村を興すための教育実践Ⅱ自然学習に取り組んできました。子ども達には自然を科学的に捉え、考えさせることはもちろん、生きる力もつけさせるものでした。



### ■ 講談社発行 戸川幸男著 『月山かもしか学園』

(戸川幸夫動物文学全集Ⅱに収録)

・ 西川町大井沢小・中学校の自然観察教育「かもしか学園」を題材にしたモデル小説。

・ 朝日連峰の山間部にある大井沢村に、三十五年ぶりに故郷に赴任する校長と僻地教育を志望してきた新卒教師の二人が、恵まれた自然を利用した教育を志し、子供たちが野鳥、獣類、草花、気象、昆虫、魚類、地学、撮影などのグループにわかれ、研究活動を活性化させていきます。

・ 教育委員長を兼ねる村のボスたちは、校長たちの理想を理解しようとして、相談なしに活動を進めたとして、ことごとく妨害をしますが、子供たちの研究成果はあがり、世間に知られ始めます。

・ 「風のおんつあん」という猟師が登場し、子供たちの研究に協力します。「風のおんつあん」は、村のボスが隣市博覧会への資料出品を邪魔すると、一人でボスの家に交渉に行き男たちを相手に立ち回りを示しますが、ボスの家が火事になったときは、危険を顧

みずボスの娘を救い出し、ボスの反省もあり、子供たちの研究は一層進んでいきます。

### ■ 大井沢自然博物館

一九五一年(昭和二十六年)四月、大井沢小中学校の学校教育の一環としての自然研究が発端となり、地域ぐるみの自然教育の組織が生まれました。

一九五三年(昭和二十八年)、県教育委員会は研究資料の一般公開を計画し、鉾山植物と動物の標本を陳列し、大井沢自然博物館と名づけ、翌年の昭和二十九年六月九日には山形県から博物館に指定され、その後一九六〇年(昭和三十五年)十二月八日、旧博物館が建ち、一九八九年(平成元年)七月十七日、現在の博物館が伝承館と共に落成し現在に至ります。

大井沢自然博物館では、月山・朝日連峰及び大井沢に生息する動物・植物を地域ぐるみで収集し、はく製や標本にしたものをリアルに展示してあります。また、屋外では朝日連峰の高山植物を植栽した植物園を楽しむことができます。

自然と匠の伝承館では、各工人た

ちの工房を見学できるほか、工人の指導で昔からの伝統的技法が学べます。

### ■ かもしか学園ものがたり

(体験学習プログラム)

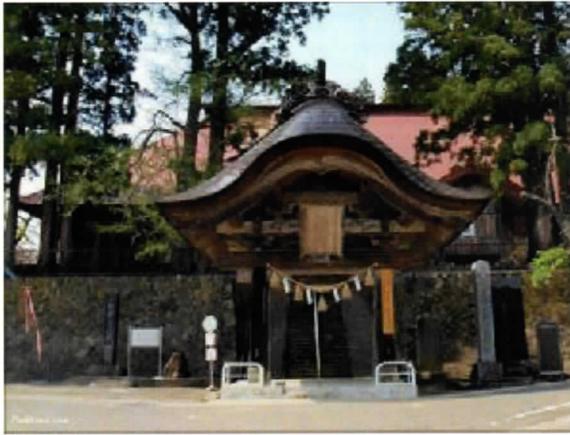
西川町大井沢地区で行われた「かもしか学園」という名の心豊かな地域博物館活動。子どもたちは月山麓の豊かな森やそこに住む生きもの達を肌身で感じ、何百年も伝承された生活文化を地域に住むお年寄りから伝えられ、山里を先祖から引き継いできました。

この地域文化・自然のすばらしさを、今の子ども達に語り伝え、生身(なまみ)の本物の体験活動を目的とした体験学習プログラムが「かもしか学園ものがたり」です。

町内外の子供たちが、農林家である大井沢の民宿へ分宿し、それぞれの生活日程で農林作業(稲作、畑作、枝打ち、山菜とり等)や食事づくり(そば打ち、餅つき等)を体験したり、自然と匠の伝承館を中心として、地元で伝わる生活工芸を各工人より指導を受け体験をします。

■文芸教育のはじまり  
岩根沢地区と丸山薫

岩根沢地区は西川町のほぼ中心部に位置し、国道一一二号線から三キロメートルほど月山方向に入った集落です。岩根沢は中山間地帯にある農山村ですが、他の地区にない特徴として、月山、羽黒山、湯殿山の三山信仰の登拝口であり、現在岩根沢三山神社である旧日月寺の門前である宗教集落の顔を持っています。



また、詩人「丸山薫」が疎開中に小学校で教鞭をとるかたわら詩作活動に取り組んだ地区として知られています。

詩人丸山薫（まるやま かおる 一八九九年（明治三十二年）六月八日—一九七四年（昭和四十九年）十月二十一日）は、戦争中から戦後一九四五年（昭和二十年）から一九四八年（昭和二十三年）までの四年間にかけて西川町岩根沢に疎開し、岩根沢小学校の代用教員として勤務のかたわら、地区の人たちと交わり、「北国」「仙境」などこの地を題材とした多くの作品を残しました。

●岩根沢小学校グラウンドにある  
丸山薫の詩碑に刻まれた詩

人目をよそに  
春はいのちの花を飾り  
秋には深紅の炎と燃える  
あれら山ふかく  
寂寞に生きる木々の姿が  
いまは私になった

■丸山薫記念館

丸山薫を慕う全国の人たちの協力で建てられ、丸山薫の原稿や文具などを収め展示しています。現在は毎年丸山薫を慕う人たちの集いが開催されるなど、地域の文化活動の拠点となっています。



●北の春

どうだろう  
この沢鳴りの音は  
山々の雪をあつめて  
ごうごうと谷にあふれて流れくだる  
このすさまじい水音は  
緩みかけた雪の下から  
一つ一つ木の枝がはね起きる  
それらは固い芽のたまをつけ  
不敵なむちのように  
人の額を打つ  
やがて 山すその林はうつすらと  
緑いろに色付くだろう  
その中に 早くも  
こぶしの白い花もひらくだろう  
朝早く 授業の始めに  
一人の女の子が手を挙げた  
—先生 つばめがきました  
(詩集『仙境』から)

## 西川町の観光情報

### ■月山

山形県のほぼ中央に位置し、標高一九八四メートル。珍しい楕型アスピーテ形式の火山で、朝日連峰、飯豊連峰とともに磐梯朝日国立公園に指定されており、百名山の一つです。

出羽三山の主峰であり、山岳信仰の山として知られ、山頂の月山神社には「月読命」が祀られており、奥の細道の松尾芭蕉が、月山に登山し「雲の峯 いくつ崩れて月の山」と歌いました。

豊富な残雪により、リフトも設置され夏スキー（四月上旬～七月末頃）が可能です。また、雪解けとともに咲き誇る高山植物、秋には鮮やかな紅葉など、四季折々にトレッキングも楽しめます。

### ■県立自然博物館

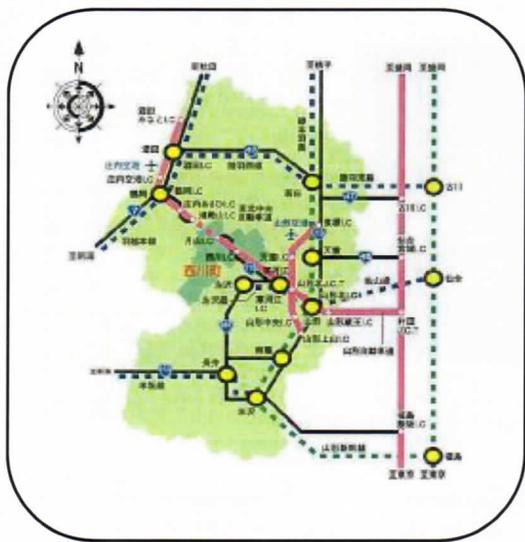
『磐梯朝日国立公園』内にあり、ブナ林を中心とした豊かな自然環境のもとで、自然に触れ合いながら『自然の仕組み』や『自然と人間の係わり合い』などを理解いただくための施設です。

園内はネイチャーセンターを中心として、野外遊歩道沿いに自然観察のための各種広場、体験ゾーン、展望台、野鳥観察小屋などが設けられています。



### ■六十里越街道

千三百年頃から、内陸と庄内を結ぶ物資輸送、そして出羽三山の湯殿山、月山への参詣の道として栄えてきました。しかし近代化の波の中、人々に忘れ去られ風化の一端を辿っていましたが、近年、歴史的な街道として見直され、多くの方の努力により測量が行われ地図上に再現され、街道の宿場として栄えた志津温泉周辺から当時の石畳が発掘されるなど、先人たちの息吹を感じることが出来ます。



お問い合わせ先 〒990-0792 山形県西村山郡西川町大字海味510

西川町総務企画課 企画担当 TEL0237-74-2112 FAX 0237-74-2112